

# 『宗門統要集』について(上)

石井修道

## 一 はじめに

道元の引用の最も多い語録類のうち、景德伝灯録と聯灯会要について以前少しく考察の機会をえたが、また別の機会に伝灯録卷二十七の「諸方雜拳微拈代別語」から聯灯会要のいわば「拈古門」のみの公案の歴史的集大成の展開の中で、各灯史と語録類を中間に考え、その最も大きな影響のあるものとして、大慧の正法眼蔵や雪竇の語録などを分析してみた。<sup>(2)</sup>

近年、駒沢大学大学院博士課程の永井政之君は「雪竇の語録の成立に関する一考察」(駒沢大学大学院仏教学研究会年報第六号昭和四十四年三月)の斬新な論文を發表し、今後の研究に有意義な示唆を与えられたが、同年報に同課程の石川力山君は「金沢文庫本『明州大梅山常禪師語録』について」の論文を發表し、その中に東洋文庫所蔵の「宗門統要集」の資料を紹介している。私はかねてからこの資料の分析をしたいと考え

ていたが、聯灯会要の成立に重大な影響のあることがわかってきた。この論文はその分析中の経過報告ともいうべきものであり、この『宗門統要集』を伝灯録と聯灯会要との橋渡しと考えたとき、さらに重要な位置を占めるのが雪竇の語録であり、雪竇の語録の研究は改めて問題にしたいと考えている。

次に禪の語録は文献史的究明はきわめて不毛であり、また難しい問題をかかえていることが、近年柳田聖山教授によって何度か指摘されている。たとえば「祖堂集」について次のようにいわれている。

もと中国撰述(後述のように、朝鮮の開版者匡僞は、明かに中華の集と云っている)の筈の此の書が、中国に何の痕跡も留めず、ただ朝鮮にのみ存したことは極めて不思議であり、更に又、景德伝灯録以下の宋代の灯史類の書が、内容的に此の書を承けているに拘らず、此の書について何の記載も残さぬことも奇である。目

下のところ、本書と伝灯以降の諸書が共により古い同一の資料に基づきつつ、後者が前者の存在を知らなかったと見る外はないが、両者が共に宝林伝を承けていることは事実である。<sup>(3)</sup>

このうち「同一の資料に基づ」くとされるのではあるけれども、限定された燉煌文献の性格と時代では解明できないし、灯史類が基づいたと思われる語録類の全部の発見など考えられそうもない。だが今まではほとんど研究されなかった『古尊宿語要』の原初形態の柳田教授の解明は一つの光明ともいべきものである。最も古い蹟蔵主の二十家を説明して次のようにいわれる。

ここで考えておくべきは、蹟蔵主の当時、それらが容易に入手できぬものであったであろうという点である。大隋・投子・国師晏・洞山初・智門祚など、いずれもそうである。蹟蔵主がそれらを集めたのは、まさしく宗門に補ありといふべきであった。当時の宗門とは、臨済宗黄竜派および楊岐派の伝統を意味した。圓悟が南泉の語要の末尾に題語をかいているのは、おそらく蹟蔵主以前のことであろうが、それは南泉禅の再発見を意味した。南泉、趙州以下の二十家は、大半が宗門以外の人々である。その語録は、放置すれば散逸の限界にまできていた。<sup>(4)</sup>

この蹟蔵主が二十家（この論文の最後に系譜を示した）を集めた『古尊宿語要』は紹興の初め頃のことであり、『宗門統要集』の成立については後に考えるが、この頃盛んに重刊されるの

でほとんど同時代といってよい。趙州禅の再発見が雪竇に基づくことは言を待たないであろうが、このような『古尊宿語録』の分析に立つ時、同時に成立した『宗門統要集』もまた重要な位置を占めることが理解できるであろう。

一般に南宋に存在した語録類をあげるとき、『普門院目錄』をもって一応の目安とし、語録の成立過程の研究に利用するが、柳田教授の研究の『古尊宿語録』の明蔵本までの分析も新しい資料であろう。その外『宗門統要集』を考えるときに宋の陳実撰の『大蔵一覽集』や紹定二年（一二三九）の序を持つ『仏法大明録』も大いに役に立つ。次に関係のある大明録の「綱目」の部分をかかげよう。

祖語為之大本

景德伝灯録	天聖広灯録
建中靖国統灯録	嘉泰普灯録
宗門統要	正法眼蔵
六祖壇経	圓悟語録
宏智語録	大慧語録
五祖演禅師語録	白雲端和尚語録
真浄文禅師語録	湛堂準禅師語録
保寧勇禅師語録	竜門仏眼語録
雲峯悦禅師語録	黄竜死心語録
楊岐会禅師語録	淳熙仏照奏対録
長蘆了和尚劫外録	伊庵権和尚語録

修山主語録 禅月大師語録

九峯詮和尚語録

古塔主語録 洞山語録

洞山第二ノ代初ノ禅師語録

法華拳和尚語録 德山語録

巖頭清巖大師語録 嗣徳山

羅山法宝大師語録 嗣岩頭

明招徳謙大師語録 嗣羅山

雪峯真覺大師語録 嗣徳山

玄沙宗一大師語録 嗣雪峯

傅大士語録 龐居士語録

馬祖道一大師語録 宝峯巖山主語録

趙州語録 大隋神照禅師語録

同安ノ察ノ禅師語録 支提秀ノ禅師語録

神鼎ノ諲ノ禅師語録 清涼大法眼語録

婦宗至真ノ禅師語録 曹山語録

香巖襲灯ノ大師語録 百靈和尚語録

南泉普願ノ禅師語録 大愚ノ芝ノ和尚語録

元豐ノ滿ノ禅師語録 道吾ノ真ノ禅師語録

道吾ノ智ノ円ノ禅師語録 西禅庵定寂ノ禅師語録

法雲秀ノ禅師語録 興化存ノ獎ノ禅師語録

潞山語録 仰山語録

承天嵩ノ禅師語録 石頭大師語録

雲門文偃ノ禅師語録 雪竇語録

靈雲志勤ノ禅師語録

法灯語録

仏ノ經ノ為ノ之ノ淵ノ源

大華ノ巖ノ經

首楞ノ巖ノ經

大涅槃前後分ノ經

楞伽ノ經

維摩ノ詰ノ經

般若心ノ經

大梵天王問仏決疑ノ經

道ノ經ノ為ノ之ノ交ノ証

太上度人ノ經

太上靈三光ノ經

黃庭内景ノ經

太上昇玄ノ經

貫穿諸集

永嘉証道歌

六祖成道行狀

大智度論

杜順大師華嚴法界觀

傅大士金剛經頌

黃蘗心要

寒山子集

圭峯円覺疏序

首山念和尚語録

智門祚ノ禅師語録

妙法蓮華ノ經

大涅槃ノ經

金光明ノ經

円覺ノ經圭峯禅師註

金剛ノ經孝宗皇帝註

長那ノ含ノ經

四十二章

太上生神章ノ經

黃庭ノ經

大上玄靈ノ經

老子道德ノ經

諸祖偈頌集

肇法師宝藏論

李長者華嚴論

文殊化身

川老金剛經註

黃蘗宛陵ノ録

拾得子集

蔣之奇楞伽經序

東坡居士楞伽經跋 雪竇頌古説

大慧宗門武庫

雪堂拾遺録

聖壽莊椿録

珙和尚証道歌註

釈迦譜

釈迦方誌

壽禪師万善同帰集

長蘆蹟禪師葦江集

劉興朝悟道発真集

採撫数家入浄行諸卷

晁文元公道院集

法蔵碎金

竜舒浄土説文

南安巖志

無尽居士昭化院記

国朝名臣言行録

唐書

明道程純公語録

東坡文集

白氏長慶集

柳子厚文集

李太白詩集

唐文粹

沈内翰筆談

甘沢謠

豫章集

冷齋夜話

茗溪叢話

東臯雜録

洪舎人夷堅志

この中には、明の五家語録まで存在しなかったとされる『洞山語録』など問題も多いが、<sup>5)</sup>『五灯会元』の成立する以前の灯史の形態はもっと流動的にとらえることができるのであり、ここにとりあげた『宗門統要集』の重要性が灯史の発展過程において問題になるのである。

以上のような目下私の進めている宋代禅宗史研究の一つの

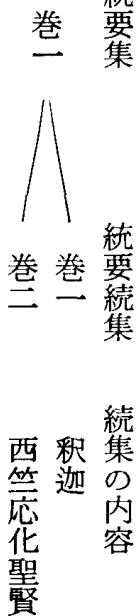
区切りとでもいうべき、大事な資料の基礎的な分析をしたのがこの論文である。

## 二 東洋文庫蔵『宗門統要集』について

『宗門統要集』は建康沙門宗永の集になるものであるが、元代の古林清茂（一二六一—一三二九）が統集を加えて、『宗門統要統集』として一般に知られ、統集は明蔵に入蔵されることもあり、日本の叀蔵でも活字化されている。統集は後代にも影響を与えたようで、たとえば今回問題にしている拈古に關して清の浄符の集大成である『宗門拈古彙集』は、自序によると明らかに統集を前提としている。その「宗門拈古彙集凡例」をみると、

是集、宋元以上諸師拈提語、既載統要。而宋元迄今諸師、所未載者、凡一拈一別、一代一徵、皆準統要成規。次第統之、其諸師有拈語、而統要乏機縁者、増補之。統要有機縁而乏拈語者、茲不録。（p. 115, p. 258c）

とあり、宋元代までの拈古に關しては『宗門統要』とその統編の『宗門統要統集』ではほとんど尽くされた感があり、またそのような資料として後世受け取られていたのである。統要と統集との關係をまず示そう。



卷二 — 卷三 四祖下〜六祖下

卷三 — 卷四 南嶽、南嶽下一世、二世

卷四 — 卷五 南嶽下二世

卷五 — 卷六 南嶽下三世

卷六 — 卷七 南嶽下四世

卷七 — 卷八 南嶽下四世

卷八 — 卷九 南嶽下五世

卷九 — 卷十 南嶽下六世

卷十 — 卷十一 南嶽下七世

卷十一 — 卷十二 南嶽下八世〜十世

卷十二 — 卷十三 青原、青原下一世、二世

卷十三 — 卷十四 青原下二世、三世

卷十四 — 卷十五 青原下四世

卷十五 — 卷十六 青原下五世

卷十六 — 卷十七 青原下六世

卷十七 — 卷十八 青原下七世

卷十八 — 卷十九 青原下八世〜十世

卷十九 — 卷二十 統南嶽下十二世〜十四世

卷二十 — 卷二十一 統南嶽下十五世〜十八世

卷二十一 — 卷二十二 統青原下十一世〜十四世

右自南嶽下十二世、統至十八世、共二百八十六人、見録機縁、二百一十二則余。俟好事者、採撫統之。(正藏 31—2—149c)とあり、青原下は卷二十二の最後に、

右自青原下十一世、統至十四世、共一百二十人、見録機縁、四十七則。南嶽青原二派下至此、統添二卷、総四百単六人、内一百三十一人、見録機縁、総二百五十九則、間有遺漏、竝翼好事者、採撫統之。(同書 p. 591c)とあって、明確になる。

それでは共通する部分についてみることにしよう。まず青原下についてみると、ここでは次のように一致するのである。(但し深明二上座を統集では一人と数える)。

右青原下凡一十世共二百六十五人、機縁、共五百五十四則。自世尊下、至此十卷、総八百五十九人、内六百一十四人、見録機縁、総一千三百二十三則、間有遺漏、竝翼好事者、採撫統之。(卷十—三七a)

これは東洋文庫本の文であるが、正藏本では卷二十にあり、内容的に東洋文庫本の十巻が原初形態であることが理解できよう。但し正藏本は十巻とあるところが、十一巻となっており、明藏本も同じであってその点は不明である。東洋文庫本が原初形態であるといったが、南嶽下についてみてみよう。統集卷十一の最後には、

右南嶽下、至二十一世、共二百四十八人、見録機縁、総五百五十

この図示でもわかるように統集でふえたのはわずかばかりで、卷二十一と卷二十二の二巻にすぎず、しかも広範囲にわたって要約している。その取り扱った人々について、まず南嶽下は卷二十二の松源崇岳のあとに、

三則余。俟好事者、採摭統之。（同書 p. 90d）  
とあるが、そこに相当する東洋文庫本はわずかな相違がみいだせる。

右附第十二世一人、機縁、計六則、通前南嶽下至此、共二百四十九人、見録機縁、総五百五十九則余。俟好事者、採摭統之。（卷六—四四a）

この相違は、南嶽下十一世の黄竜慧南で一応終っていたのに、「附南嶽下第十二世」とあるように、慧南に嗣法した竜慶閑を加えたためである。閑の則は六則であるから説明がつくのであり、統集においては、卷二十一に収められる。

以上、統要集と統集を概観したのであるが、次回に発表することになった聯灯会要と統要集の著語のすべての比較によると、拈提した人はふえても、則の数ほとんどかわらない事がわかり、公案の集大成が、統要集をもって一応完結するといっても過言ではない。もちろん統要集以降にも多くの公案が成立するが、最も基本的な公案は出尽されたと考えてよく、その点に最も特色あるのが統要集であることを一応ここでおさえておこう。

ところで東洋文庫本と統集の相違点を解明するために、東洋文庫本の書誌学的な考察をしておこう。

東洋文庫に所蔵される統要集は、宋版で、日本に現存する唯一のものであり、卷四の五枚目の裏の半葉の欠紙を除いて

は、印刷はよいとはいえないが一応完本である。目録によると卷十のあとに「曹溪宗派直下図附」とあるから、宗派図があったのであろうが、東洋文庫本にはそれが無い。この東洋文庫本はもとは普門院に所蔵されていたもので、タテ六・二彦齋とヨコ二・八彦齋の長方形の一重の枠の普門院の朱印が各卷に二・三ヶ所おされ、全体で二十七ヶ所ある。おそらく『普門院目録』の「宗門統要 一部 五冊」に当り、円爾弁円の将来本そのものである。東洋文庫本はタテ二三・七彦齋、ヨコ一五・九彦齋のやや小さい版で、左右双辺、有界、十行二十字、匡郭内がタテ一八・四彦齋、ヨコ一・八彦齋、版心は「統要（卷数）（丁数）」となっている。版心にとりどころ刻者名がみえ、刻者名がみえる巻数は、卷一、卷二、卷四、卷八、卷十に限られ、特に卷一には多数ある。判読できる主なものは、陳□、薰明、蔡忠重刊、施端重刊、徐、王寔換、洪昌重刊、陳□重刊、小朱刀、陳顥（以上卷一）朱坦重刊、楊昌重刊、張季重刊（以上卷二）王□重刊、陳□（以上卷四）□□重刊（卷八）蔡正刀、王重刀、元祐（以上卷十）などである。特に重刊とあるのは、この東洋文庫本の性質を示しており注意すべき点である。重刊であることは卷十の最後に次のような跋があることから知られる。

清淨寂滅、積之体也。善応無方、積之用也。吾夫子之贊易曰、無思也無為也、寂然不動、感而遂通天下之故。豈非能定然後能応歟。

儒積之教雖異、極其理性之妙、蓋亦殊塗而同歸。余於內典、嘗究心焉、非談空而廢務也。以此洗心滌慮、達於事變焉耳。積典之傳於世、充棟汗牛、而統要之作、撮其精義。四明所刊、歲久漫滅。命工新之、以壽其傳。庶有補於後學之万一云。淳熙六年五月既望、皇子魏王跋。

この淳熙六年（一一七九）より後れること四年の淳熙十年に悟明は『聯灯会要』の序を書いている。また跋を書いた皇子魏王については、四明を中心にめざましい仏教活動があり、改めて問題にしなければならぬであろう。

さてそれでは、重刊となるとはいかなるものであったか、いつ開版されたかという問題になる。東洋文庫本の序は、統集のものと異っており、その序は不明の字もあるが次のようになっている。

#### 統要序

達磨不西来、東土未嘗欠少。若曰教外別伝、端是強生節目、不立文字、文采已彰、直指人心、早是迂曲了也、見性成仏、拋沙撒土。与麼説話、若約衲僧門下、如隔靴抓癢相似。何況被人將。他方此土、咳唾抄割出来、七花八裂。更有諸方、不識好惡、老凍膿、於註脚下增添、惣而号曰宗門統要。去道遠矣。然雖如是、把住也、十方諸仏、六代祖師、酌然無出氣分。放一線道、且要錦上添花。又是干戈一動、四海塵昏、不有<sup>在力哉力</sup>□□、安能平安哉。諸宗師尽用上將機謀、執□斬□定禍乱、立致昇平。然其間世喻不能及処、多悞初機不可亡言。且如秉金剛王宝劍、奮大自在威、權機輪転処、千眼猶

『宗門統要集』について（上）（石井）

迷、諸天罔測。方縱中有奪、奪不収功、殺裏有生、生不受賞。或縱奪逆施、殺活同時、或扶弱抑強、復崇高復下。或<sup>抛力</sup>款結案、復就身打劫、或雷轟電掣、復綿裹秤鎚、無尔摸索処。故曰、大用現前、不存軌則。已得者視之、可以陶冶性靈、周旋機智。未領解者、可以觀標認月、得兔忘蹄。切忌狂狗趣塊。上他機境、隨語生解、分別識情、非徒無益、転更汨没苦海、流浪風塵、却要做箇平常無事人、了不可得。若能將識情解会、弃擲静尽於非思量絶分別処。着些精彩、覷得破截断意根、倒転舌頭。天下老和尚、不奈尔何。非惟自利、堪与人天為師。然後知宗門統要、功不浪施。噫此是甚麼人行履処、豈可容易卜度便能成辦。思鑿禪人、憫其兵火之余、無伝於世。乃深勲懇以結衆縁。所冀冷灰中忽然豆暴、蹤出一人半人報答仏祖深恩。求叙於本然居士鄭誥云。紹興五年十一月三日、寓丹丘天寧六和堂書。

ところが、統集に収められている序はさらに古いのである。つまりこの本然居士の序は紹興五年（一一三五）であるが、統集の耿延禧の序は、紹興三年（一一三三）にかかれ、しかもこれも重開であつて、初刊のものではない。つまり次のような序となっている。

#### 重開宗門統要序

竜圖閣直学士左朝請郎提挙江州太平觀耿延禧撰

大宝積経云、如来所演、八万四千法蔵声教、皆名為文、離諸一切言音文字、理不可説、是名為義。又云、若諸経中文句広博、能令衆生心意踊躍、名不了義、若有宣説文句及心、皆同灰燼、是名了

義。大涅槃經云、若人聞說大涅槃一字一句、不作字相、不作句相、不作聞相、不作仏相、不作說相、如是義者、名無相相。以是觀之、諸仏以無說說、其來久矣。達磨西來、重為拈出、為其拘滯於教相也。則曰、教外別伝、不立文字。為其委曲於情解也。則曰、直指人心、見性成仏。是故答第一義諦、曰廓然無聖。則憐其不契而渡江。慧可再拝依位而立、則以為得髓而伝法。是豈与諸仏有異耶。蓋所謂當機觀面提、觀面當機疾、如石火電光、擬議即差、念起情生、斯為閑鎖耳。故余嘗論之、如來老婆心切、乃曰、正法眼蔵、分付摩訶迦葉。臨濟丈夫氣概、乃曰、正法眼蔵、向這瞎驢辺滅却。是二老子、同曲異調、若聞余是說言語及心皆同灰燼、不作一字一句及諸名相、則如來禪祖師禪。庶幾意領而神解乎。宗門統要、首以西竺諸仏、繼以東震諸祖、及前世宗匠。所以指導後学、与後世作家。所以扶剔前人者、合為一書、皆出乎文字、而直指人心。学者不可不家有而日見之。預章李氏、鏤板以伝、兵火之余、既已煙滅。莆陽天寧長老慧沢、既伝心宗、復明教意、知如來祖師禪、等無有異。乃命刊行、以垂久遠、求余為序、以冠篇首。昔僧問巴陵、祖意教意是同是別。陵云、鷄寒上樹、鴨寒下水。又問、三乘十二分教則不疑、如何是宗門中事。師云、不是衲僧分上事。如何是衲僧分上事。曰、貪觀白浪、失却手撓。若知此者、則三世諸仏無所說、歷代祖師未嘗伝統要。徒集葛藤、居士戲加序引、可付之一笑而已矣。

紹興三年二月 日序（前掲書、二一d～二二a）

序者の耿延禧は『圓悟語録』にも序を書いた人であるが、こ

の中に預章李氏が開版したとしており、これが初刊本にあたるのであろうが、この版については今のところみいだせない。一体、統要集の編者宗永なる者も現在のところ不明であり、統要集が宋版に依ったとするならば、初刊本ではなく、重刊本の紹興三年版であろうし、東洋文庫本はさらに重刊されたもので、それも紹興五年版のあとを受けているのである。

現在、大東急記念文庫に三冊本の統要集があると禪籍目録などには記されているが、實際みてみると、上は統要集の巻七にあたり、中は統集巻九、下は統集巻十となっている。上のみが統要集であるが、この統要集は、東洋文庫本と刻者名が異り、巻末に次のようにある。

鼎州丁 慈覚施財

黄 景純勸成

医博熊 文政勸成

鄱陽比丘 慧允勾当

この中で慧允等は不明であるが、鄱陽の活躍からして、黄竜派の活躍と規を一にしているのではあるまいか。たとえば黄竜祖心や報本慧元も活躍している。統集にある初刊本と考えられる預章の李氏も、この南昌地方に活躍する「宗門」つまり楊岐・黄竜の人々と無関係ではないだろうし、施財した人が鼎州の人であるところからも幅広い支持を得た人の開版であったと思われる。編集者が建康沙門とあるが、紹興三年の



版は天寧長老慧沢の力によるところであつて、この人はあるいは黄竜慧南に嗣法した三角恵沢とも考えられる。東急本は宋版の覆刻版であるが、続集の原版とも異り、もちろん東洋文庫本とも異るところの初版の系統をあるいは引くものであるろうか。また東洋文庫本の原版は思鑿禪人による覆刻であるが、前に示したようにわざわざ南嶽下十二世の竜慶閑を一人だけ附している点を考えれば、あるいは何らかの関係があつたのかもしれない。しかも二年を経ずに重刻されたとするならば、紹興三年版を知らずに再開したとも考えられる。

以上のように考えて来るとき、紹興三年（一一三二）より初刊本がどこまで遡ることができか大きな問題となるが、現在のところその決め手を欠いている。拈提集團の最後に属し生没年のわかる人は、雲蓋智本（一一〇七年没）や黄竜祖心（一一〇〇年没）がいる。拈提は生存中の語録や伝承から記録されることもあり、灯史類にも生存中に記録された例もある。ただ祖心の場合、本文ではないが、巻五や巻七にある目録の部分に拈提宗師というのが記載されている中に「黄竜宝覚心禅師」とある。宝覚大師の号は、『預章集』巻二十四の「黄竜心禅師塔銘」によると、死後に駒馬都尉の王誥が請うたものとある。このように考えるとやはり拈提宗師の死後に続集に記録されたと考えられてよいのではなからうか。

以上によって東洋文庫本の性格をみてみたのであるが、多

くの開版から続集が当時の禅界に強く求められたことも想像できる。続集は明蔵本系とは別に内閣文庫に元版が存するし、先に述べたように大東急記念文庫にも二冊存す。続集の開版は続集の字数等をそのまま受けており、前述した公案の定型化が続集開版時まで強く影響しているのを見ると、続集はいままで評価を受けてきたものより、もっと資料価値をみとめてよいのではなからうか。

次に簡単に『聯灯会要』のことについても触れておきたい。聯灯会要の宋版は今のところみることができない。続蔵経の原本は元禄三年（一六九〇）の開版本で、この元禄本は元の至元年間に開版された元版を受けている。元版は宮内庁書陵部に十冊本があり、立正大学図書館に現在そのうちの四冊と一冊の補写本がある。宮内庁本と立正大本は全く同じ版であるが、この二書の刊記が共に「至元辛卯」とあり、至元年間（二三三五―一三四〇）にはこの干支がない。なにかの誤りであろう。この二書から想像するに、この版は宋版の忠実な模刻版であり、宋版のおもかげをよく伝えている。宮内庁本は、タテ二四・八行、ヨコ一八・一行、匡郭内はタテ一八・一行、ヨコ一二行、左右双边、有界、十一行二十字である。ただ今のところ宋版の開版事情など詳しいことは不明であるが、いずれまたの機会に問題にしたい。

三 おわりに

統要集と聯灯会要のすべての著語の比較の資料は、紙数の関係もあり次回に発表することになったので、統要集と会要の著語の関係の結果の概要を述べて、それから得られた問題点を指摘することにしよう。

まず統要集に著語した人(系譜の△印を参照)の主な人は、雪竇重頤の二一三回、大滙慕詰の七九回、雲門文偃の四七回、翠巖守芝の四七回、五祖師戒の四一回、瑯琊慧覺の三六回などが数えられる。会要もこれらの人はほとんど受け、全体的に会要は統要集から受けていることが次回発表の資料で理解できるのであろう。その外は拙論で指摘したように大慧宗杲が六九回あることが特色ある点である。かつて別論で述べた景德伝灯録の法眼派の影響はない訳ではないが、大きく法眼派は後退しているといつてよいであろう。

さてこの結果から次に問題点を述べると、統要集の著語はいわゆる拈古門に限られているようで、会要と異って頌古門は例外なく取り上げられていない。この点は統要集の最も大きい特色ともいってよい。おそらく建中靖国元年(一一〇一)に出来た統灯録はその傾向をはっきり区別しており、当時個人の話録に頌古と拈古が百則およびその倍数などを基準に流しはじめていたことと無関係ではないであろう。たとえば

統灯録卷二十七の拈古門における拈提者を次にかかげると、

明州雪竇重頤明覺禪師二十則、洪州黃竜慧南禪師二則、東京淨因懷璉大覺禪師三則、滁州瑯琊慧覺広照禪師四則、雲居山曉舜禪師三則、婺州承天惟簡禪師五則、洪州翠巖可真禪師一則、東京智海慕詰真如禪師二則、廬山東林常総照覺禪師一則、南岳雲峯文悦禪師五則、潭州大滙懷秀禪師一則、越州天衣義懷禪師三則、廬山開先善暹禪師二則、湖州上方齊岳禪師二則、江寧府蔣山法泉仏慧禪師三則、雲居山了元仏印禪師一則、杭州仏日智才禪師二則、東京智海本逸正覺禪師三則、杭州承天伝宗禪師二則、東京慧林徳遜仏陀禪師一則、台州瑞巖子鴻禪師二則、東京法雲法秀円通禪師四則、衛州元豊清満禪師二則、東京淨因惟岳仏日禪師一則、秀州資聖盛勤禪師二則、廬山棲賢智遷禪師三則、江寧府清涼和禪師一則、澧州夾山自齡禪師三則、廬山開先心印禪師一則。

とある。この拈提宗師をみると、系譜でもわかるように(詳細は次回の資料)統要集と多く一致する。統要集は統灯録より引用したのではないが、拈提宗師が同じ評価を持って当時の学人に親しまれていたことは理解できるのであろう。

次に会要にだけしか現われない拈提宗師は限定された人々である。

滙山善果(嗣開福寧)、黄竜悟新(嗣黄竜心)、禾山慧方(嗣黄竜新)、海師信(嗣瑯琊覺力)、開善道謙(嗣大慧杲)、夾山自齡(嗣仏日才)、帰宗慧誠(嗣報恩安)、教忠弥光(嗣大慧杲)、鼓山安永(嗣西禅需)、五祖法演(嗣白雲端)、広慧元璉(嗣首山念)、

国清行機（嗣護国元）、西禅鼎需（嗣大慧杲）、西禅守淨（嗣大慧杲）、西堂智蔵（嗣馬祖一）、三角（不詳）、資寿尼妙総（嗣大慧杲）、慈雲彦隆（嗣雲居祐）、慈受懷深（嗣長蘆信）、昭覚克勤（嗣五祖演）、蔣山法泉（嗣雲居舜）、上方齊岳（嗣福昌善）、真浄克文（嗣黄竜南）、草堂善清（嗣黄竜心）、智海本逸（嗣開先暹）、天童曇華（嗣虚丘隆）、天封成（不詳）、南華知昺（嗣仏鑑勲）、仏鑑慧勲（嗣五祖演）、保寧仁勇（嗣楊岐会）、大慧宗杲（嗣昭覚勤）、楊傑居士（嗣天衣懷）、竜門清遠（嗣五祖演）、梁山縁観（嗣同安志）、靈敞仲安（嗣大瀉泰）。

この中で限定されたといったのは、統要集の成立以後に拈提されたものがほとんどであるという点である。（系譜の※印参照）またすでに拙稿「大慧宗杲とその弟子たち（二）——『宗門聯灯会要』の歴史的性格——」（印仏研究十九卷二号）で述べたごとく、大慧派を中心として加えられているのである。その外、統灯録の拈古門の人々と比較すると会要において加えられている部分もある。

会要が統要集を前提としていることは、割注の部分に、

統要作大于語誤。（慧条卷七、z. 136, p. 277a）

とか、

統要云、潭守姓韓、非文公也。（韓愈条、卷二十、同書、p. 378a）

とあり、元禄本や統蔵本にはないが、

伝灯統要収在芙蓉鏡下（常興条、卷五）

『宗門統要集』について（上）（石井）

と元版にはある。<sup>9)</sup>これによって会要が、統要集を参照したことは明らかであるが、悟明が序を書いた時、伝灯・広灯そして統灯の名をあげながら、統要の名をあげなかった。その理由は著語の比較でもわかるように、また本則の比較検討すればさらに理解できるのであるけれども、あまりに多くの引用があったがためではなかったであろうか。また統要に不満も多かった。それは則の順序と嗣法関係のあいまいさの点である。会要は先にあげた三灯史を基本に置いたので、則の順序はその禅師の条の成立順序を旨としているに対して、統要は当時成立していた語録類のうちから雪竇語録を中心に拈古を取りだして整理したが、その整理は則の順序に重きを置かなかった。嗣法関係のあいまいさもその時生じたもので、先の割注で批判されている通りである。

その外、会要は拙論で指摘したごとく、看話禅の発展に伴って、実際に大慧派で拈弄したものを採用しており、大慧の正法眼蔵の引用などそのよい例であろう。これらの点が五灯会元に用いられる原因ともなったものと思われる。

ただ整理されたものが会要であり、未整理的要素が多く残っているのが統要集であったとしても、それは統要集の編者自身が覚悟していたことであり、所々に散見する割注に異本との違いを指摘していることからわかる。一字や二字の違いは、各禅師が各則を取り上げるとき、あるいはその拈提を

記録するとき当然おきるものであり、同じ則であっても語録に引用されたものをみてみると、省略があったり、敷衍があったりすることは、現存する語録類からも理解できる。そのように考えるとき統要集はかつて祖堂集や伝灯録が行ってきた「同一の資料」から整理したと同じような作業過程から出来上ったものではあるまいか。統要集に割注としてある「有本」「有云」「或曰」などは、当時成立していた語録類が多いのであって、すべてが灯史類からではないようである。そこに統要集の最もすぐれた資料価値があり、それらの語録類とは何か、また別の観点からの当時成立していた語録類を調査することによって、宋代の語録の成立を考えてみたい。

(1) 石井修道「真字『正法眼蔵』の基づく資料について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第三号 昭和四十六年十月)。

(2) 石井修道「大慧宗杲とその弟子たち (一)——大慧『正法眼蔵』と『聯灯会要』——」(『印仏研究』第二十卷二号 昭和四十七年三月) など。

(3) 柳田聖山教授「祖堂集の本文研究(一)」十四頁(『禅学研究』第五十四号 昭和三十九年七月)。なお最近いただいた私信によると「契高は『祖堂集』を知っているようです。おそらく読んでいたとおもいます。それが刊本かどうか判らぬが、すくなくとも、中国にその頃存在したことは確かで、これまで小生が主張して来た中国早期欠本説は再検討をせまられま

す。云々。」とあり、今後の大きな課題と思われる。

(4) 同教授「古尊宿語録考」二十八頁。(『花園大学研究紀要』第二号 昭和四十七年三月)。

(5) 私は駒大図書館に所蔵される古活字版を使用したのが、現在円爾弁円の将来した貴重な宋版が松ヶ岡文庫に所蔵され、先日同文庫をおとずれた際、古田紹欽博士より拝覧の機会を与えられた。普門院の所蔵印は東洋文庫本統要集と同じである。この著の中に「洞山語録」に関する引用は、

① 洞山語録。不求名利不求榮、祇麼隨緣過一生。三寸氣銷誰是主、百年身後謾空名。衣裳破処重重補、糧食無時旋旋營。一个幻軀能幾日、為他閑事長無明。(卷三—八b)

② 洞山良价禪師。問僧曰、阿那箇是闍梨主人公。僧曰、見祇対次。師曰、苦哉苦哉、今時人例皆如此、只是認得驢前馬後將為自己。仏法平沈此之是也。客中弁主尚未分、如何弁得主中主。僧便問、如何是主中主。師曰、闍梨自道取。僧曰、某甲道得即客中主。如何是主中主。師曰、恁麼道即易、相統也大難。(卷四—三a b)

③ 洞山語録。洞山五位句、謂、正中偏也、偏中正也、正中来也、兼中至也。兼中到也、曹山本寂禪師、受洞山宝鏡三昧、五位顯決。(卷六—一〇a)

④ 僧問洞山、妙何是仏。山云、麻三斤。(卷九—七a)

⑤ 泰首座到洞山、值喫果子。洞山云、有一物上柱天下柱地、常在動用中、動用中収不得。未審、過在什麼処。泰云、過在動用中。洞山云、侍者掇却果卓。(卷九—九a)

⑥ 洞山語録。師到興平、便礼拝。平云、莫礼老朽。山云、礼非老朽者。平云、佗且不受礼。山云、它亦不曾礼。(卷十一—五b)

⑦ 洞山良价禅师、因為雲巖諱日營齋、僧問、和尚初見南泉発迹、為什麼与雲巖設齋。師曰、我不重先師道德、亦不為仏法、只重不為我說破。僧又問、和尚為先師設齋、還肯先師也無。師曰、半肯半不肯。曰、為什麼不全肯。師曰、若全肯即孤負先師也。(卷十一—一a b)

⑧ 洞山二代初禅師語録。問、文殊普賢未参師時如何。師云、趕向水牯牛欄裏着。云、与麼則和尚入地獄如箭射。師云、全憑子力。(卷十二—四b)

⑨ 洞山語録。五臺山上雲蒸飯、仏殿塔前狗尿天、幡竿頭上煎鏡子、三箇猢猻夜簸錢。(卷十二—九a)

⑩ 洞山語録。師或問如經蠱毒之鄉水也。不得露着一滴這裏合下得什麼語。(以下略)(卷一六—五b)

⑪ 洞山語録。師因一僧在延壽堂不安要見師。(以下略)(卷一六—七a)

とあり、④や⑨の「洞山語録」は守初の語である外は、洞山良介の語であり、⑨は⑧が出たので省略されたものとする、当時洞山語録が存在したことになる。その外東洋文庫蔵の『宗門統要集』巻七の目録の道吾の下に「伝灯曰円智曹洞録宗智」の文字がみえ、普灯録巻十の仏心才の条に古洞山録の名がみえる。また鈴木哲雄助教授の「瀋山語録成立の背景とその性格」(「印仏研究」第二十卷二号)で指摘される洞山語

『宗門統要集』について(上)(石井)

録と同様な瀋山語録もまた問題となり、これらの点は慎重に検討を要する。なお大明録の引用する統要集に関する限り言句の異同があるが正確である。

(6) 統集で拈提宗師がふえるのは、統要集の成立以後の禅者ばかりではなく、すでに統要集でとりあげられた拈提宗師も追加されているが、統集の課題はここでは省略する。

(7) 南嶽下の場合、統要集では九世の汾陽善昭の条に二人の著語があつて、それ以後にはなく、会要も巻十一の善昭の条までほとんど出尽し、十世に二つ、十一世に二つあり、楊億の条に広慧璉、汾陽昭、大慧が著語している例を除いて、巻十八までの十八世までない。また青原下の場合、統要集では十世の雲居斉の条までであるが、会要も同じであつて、それ以降にない。ただ雪竇の影響もあつてか青原下の則が後まで公案化されている。この例でもわかる通り公案の定型化は、統要集でもって一応の帰結をみせる。

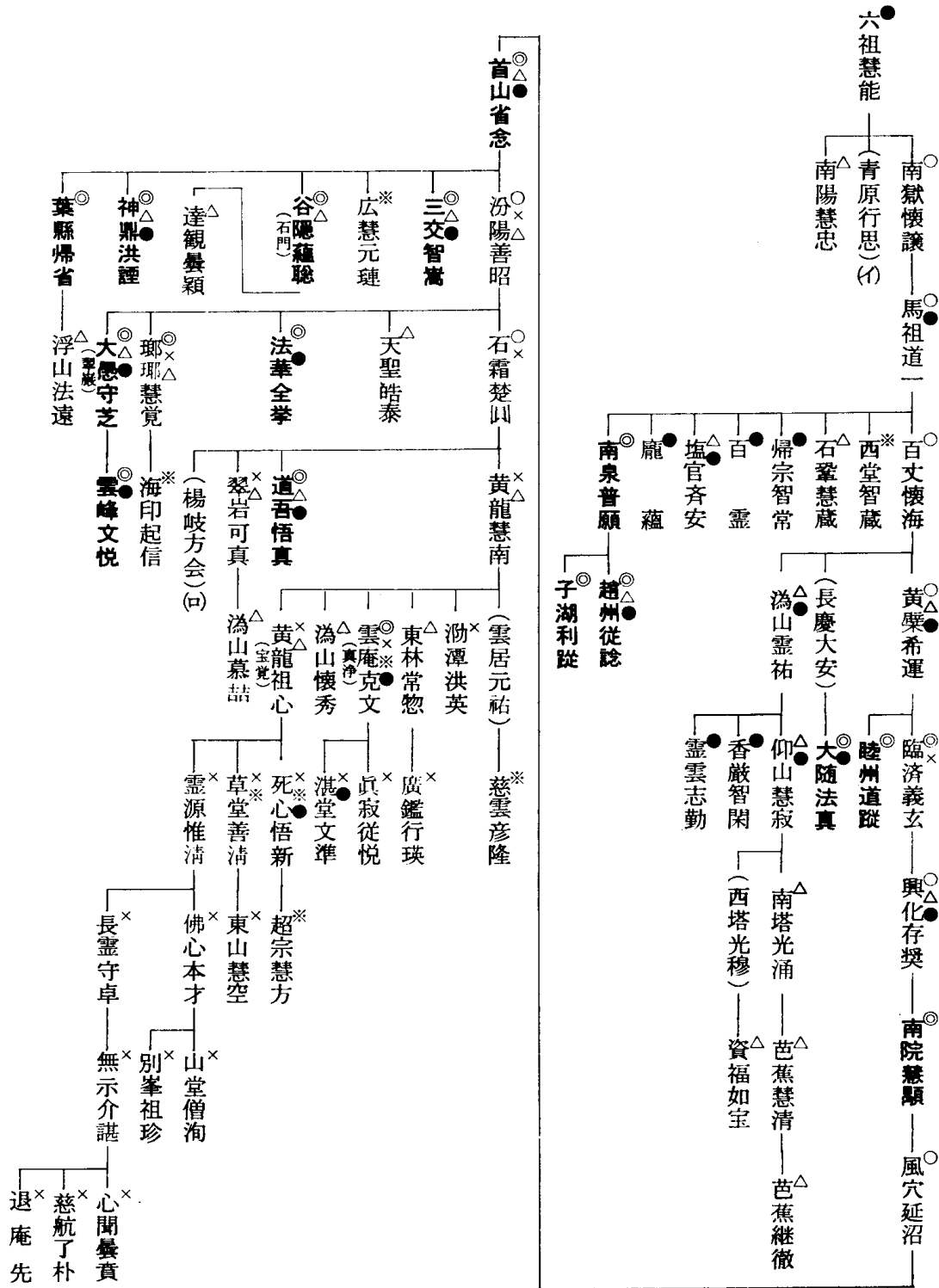
(8) 注5を参照。

(9) 元禄本と元版の相違は目録にもあらわれており、今後の研究に待ちたい。

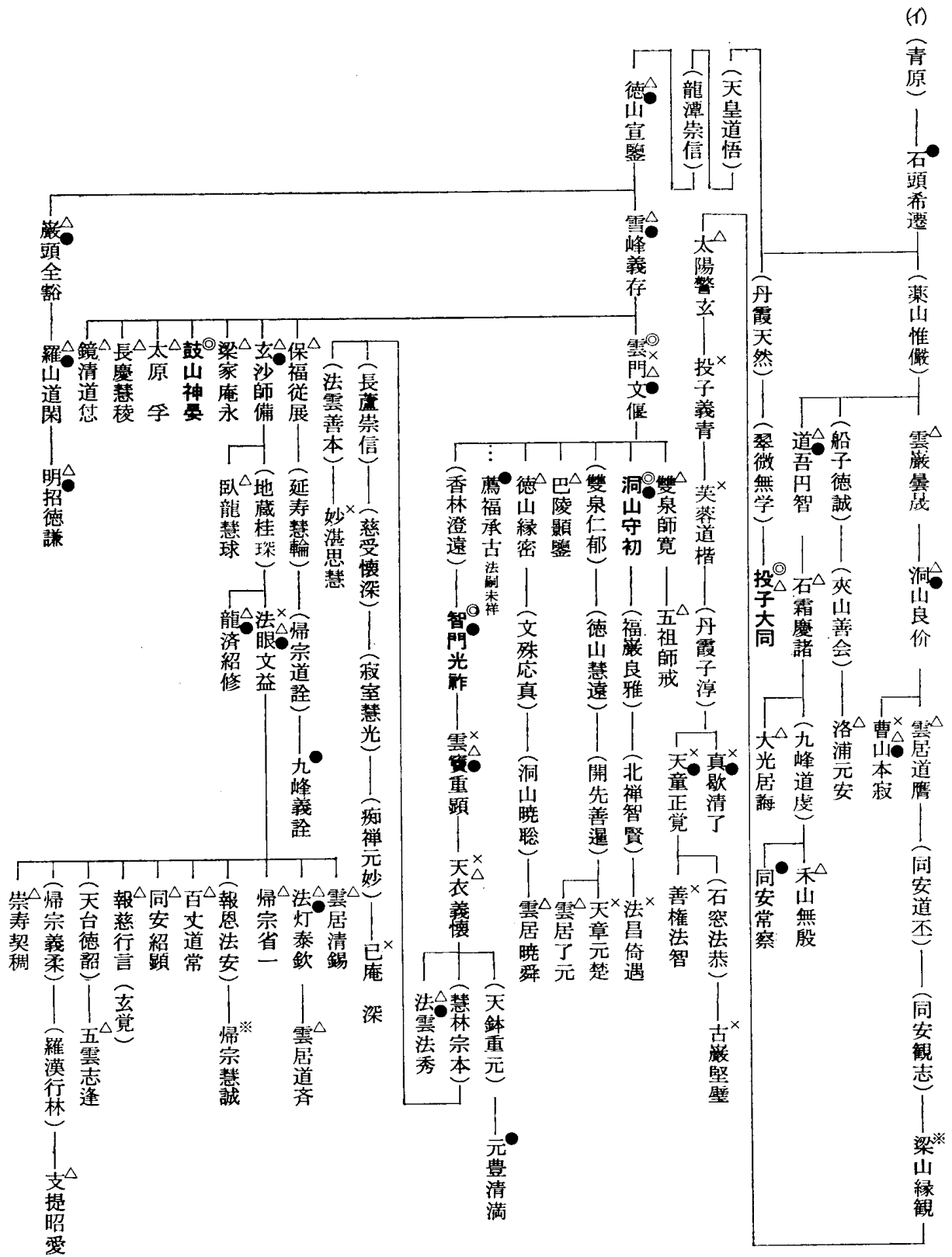
(一九七三・十一・四)

(付記) この原稿を投稿して後に柳田聖山教授の「宋版禅籍調査報告」所収の「二、宋版『宗門統要集』十巻の調査」(「禅文化研究所紀要」五号昭和四十八年十月)を拝覧した。あわせ参照されたい。

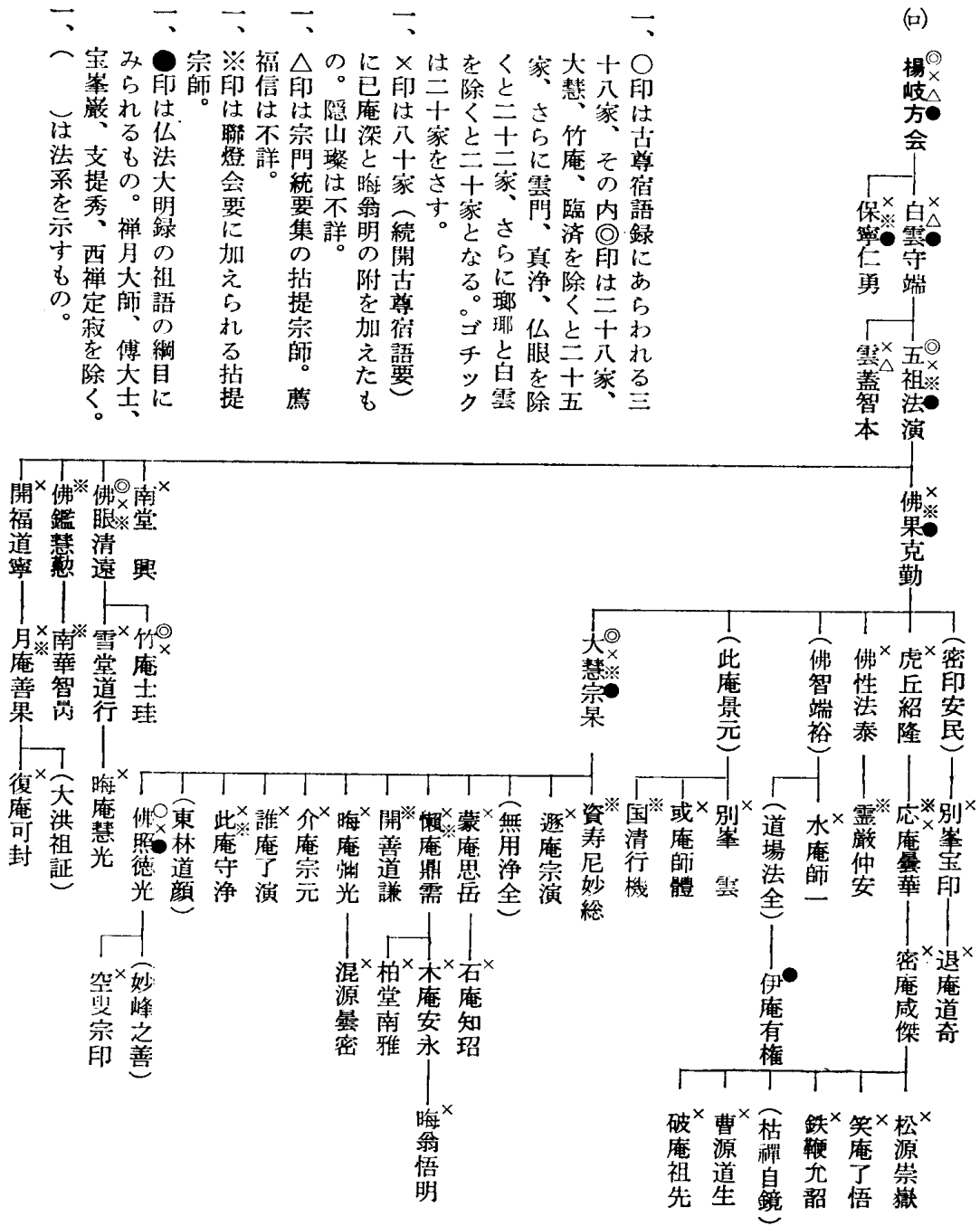
宋代現存の語録の覚え書(系譜)  
① 南嶽系、黄竜派



② 青原系



③ 南嶽系、楊岐派



一、○印は古尊宿語録にあらわれる三十八家、その内◎印は二十八家、

大慧、竹庵、臨済を除くと二十五家、さらに雲門、真浄、仏眼を除くと二十二家、さらに瑯琊と白雲を除くと二十家となる。ゴチツクは二十家をさす。

一、×印は八十家(統開古尊宿語要)に已庵深と晦翁明の附を加えたもの。隠山璨は不詳。

一、△印は宗門統要集の拈提宗師。薦福信は不詳。

一、※印は聯燈会要に加えられる拈提宗師。

一、●印は仏法大明録の祖語の綱目にみられるもの。禅月大師、傅大士、宝峯巖、支提秀、西禅定寂を除く。

一、( )は法系を示すもの。